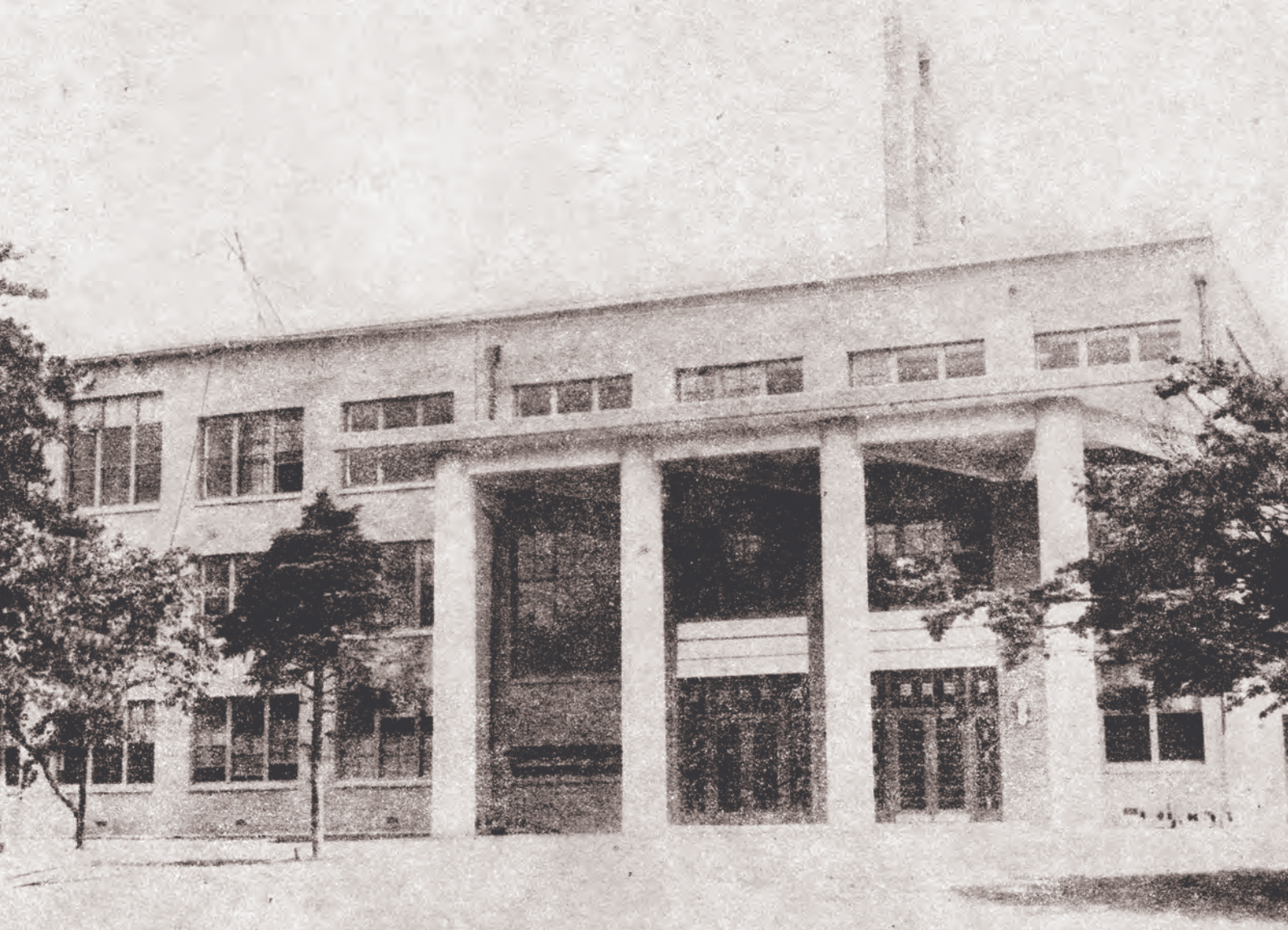
京都大学大学文書館企画展

敗戦から廃校まで

― 三高最後の年月 ―

2020年 9月1日(火)～12月6日(日)



京都大学大学文書館

目次

ごあいさつ――一
第一章　敗戦をはさんで――二
第二章　戦後の三高生――八
第三章　戦後教育改革のなかで――一四
生徒定員数の変遷、教員の変遷――二〇
年表――二一

ごあいさつ

大学文書館では、今回の企画展のテーマとして、敗戦前後から廃校に至る第三高等学校（三高）の歴史を取り上げることにしました。主に帝国大学に進む若者たちを教育する機関として、各地の高等学校には独自の校風があるなか、三高のそれは「自由」として知られ、多くの個性的な人材が三高を巣立っていきました。敗戦後の教育改革によって、三高は他の高等学校同様廃校となり、その教員たちの多くは新制京都大学で一般教育を担当することになりましたが、三高の伝統は永く京大の中に息づいていたといえます。

三高の廃校からちょうど七〇年となる今年、戦争から廃校へ翻弄されてしまう三高と、その中で懸命に学園生活を送った三高生たちの姿を資料を通じて改めて感じとっていただきたく存じます。

最後になりましたが、本展示は三高卒業生の方々をはじめとした多くの皆様による「旧制第三高等学校基金」への募金によって開催することができました。記して厚くお礼申し上げます。

二〇二〇年九月
京都大学大学文書館長
伊藤　孝夫

第一章

敗戦をはさんで

Across the Defeat

敗戦をはさんで、高等学校は混乱の極みにあったと言ってもいい。一九四二（昭和一七）年から修業期間の短縮が始まった。はじめは半年の短縮だったのが、一九四三年度入学者から一年短縮されるようになり、高等学校の修業期間は二年となった（表参照）。一九四三年一〇月にはいわゆる学徒出陣が始まった。三高からは合計一七五名の入隊が確認されている（「常設展　第三高等学校の歴史」参照）。

また、それまで文科・理科同数であった入学定員が一九四二年度から理科が多数となり、一九四五年度には文科三組・理科八組の編成となった。さらに、一九四四年度からは勤労動員が本格化し、通常の授業実施が困難になっていった。

しかし、以上述べた戦時期の諸動向は、敗戦によって短い期間にすべて廃止または以前の制度に回帰することとなった。

敗戦前後の高等学校入学・卒業・修業期間

入学	卒業	修業期間	入学	卒業	修業期間
1939 年 4 月	1942 年 3 月	3 年	1944 年 4 月	1947 年 3 月	3 年
1940 年 4 月	1942 年 9 月	2 年 6 カ月	1945 年 4 月	1948 年 3 月	3 年※
1941 年 4 月	1943 年 9 月	2 年 6 カ月	1946 年 4 月	1949 年 3 月	3 年※※
1942 年 4 月	1944 年 9 月	2 年 6 カ月	1947 年 4 月	1950 年 3 月	3 年
1943 年 4 月	1945 年 3 月	2 年	1948 年 4 月	1949 年 3 月	1 年※※※

※この学年は、中学での勤労動員が長引いたため実際に入学式が行われたのは 1945 年 7 月であった。
※※この学年は、軍学校からの入学者数をめぐるGHQ との調整が遅れたため、実際に入学式が行われたのは 1946 年 9 月であった。
※※※この学年は、在学期間 1 年で 1949 年 4 月に新制大学 1 年生となった。

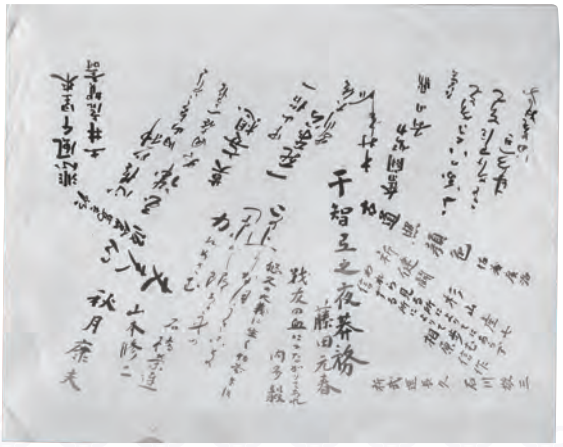
三高生の勤労動員

当初は奉仕作業の形で始まった勤労動員は、一九四四年度に入ると本格化した。図にあるように、比較的短期間の農村への動員もあったが、長期にわたる工場への動員が多くを占めるようになり、病弱な生徒などの一部をのぞき、文科・理科とも通常の授業は行われなくなっていった。

三高生の勤労動員一覧

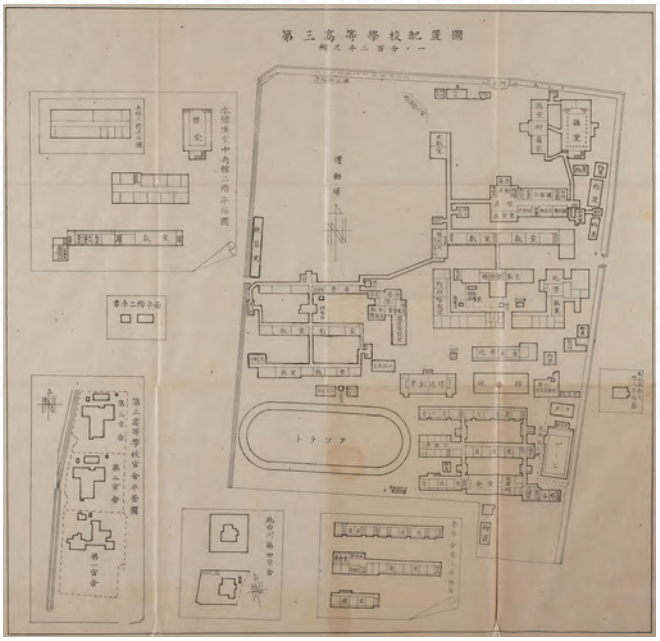
		1944年			4月					9月				1945年			4月				8月
1942年4月入学	文科					大阪造兵廠				卒業											
	理科																				
1943年4月入学	文科						明石・川崎航空							卒業							
	理科						滋賀		大阪・住友伸銅所												
1944年4月入学	文科				入学		天田郡 相楽郡等			大阪造兵廠				島津三条工場							
	理科											八幡		甲	大阪・住友伸銅所						
														乙	三菱桂工場						
1945年4月入学	文科																入学			寺田・島津疎開工場	
	理科																				

『勤労動員出張簿　昭和十九年五月以降』『日誌　昭和十九年十月十六日以降　修練部』『日誌　昭和二十年四月一日以降　修練部』『日誌　昭和二十年』（いずれも京都大学大学文書館所蔵）、神陵史編集委員会編『神陵史』より作成。



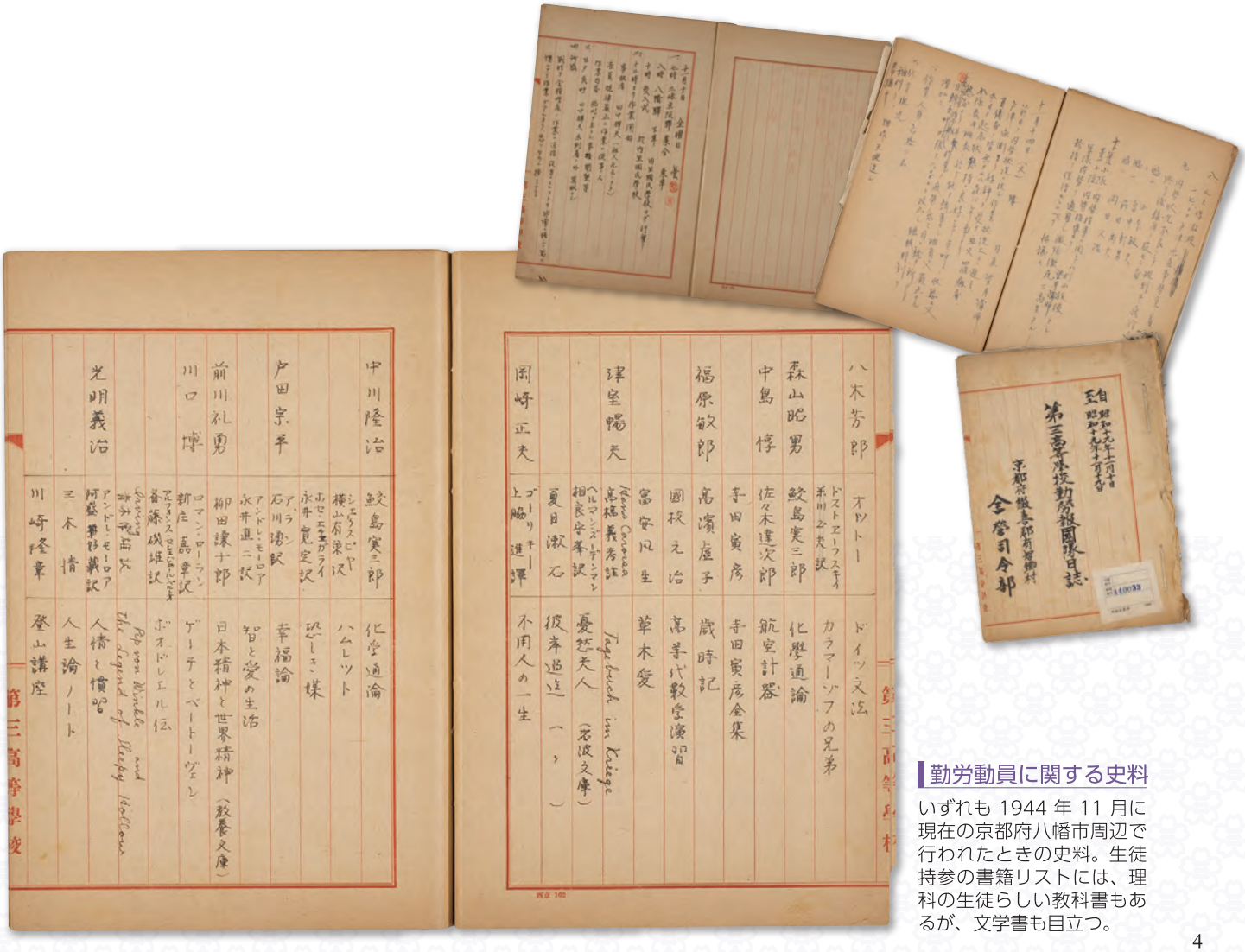
戦時下の三高生

1943年頃の三高生のスナップ。教室、寄宿舎前での撮影、軍事教練中なのか配属将校も含めた語らい、前田鼎校長を中心にした集合写真など。色紙は出陣学徒を送るためのものと思われる。



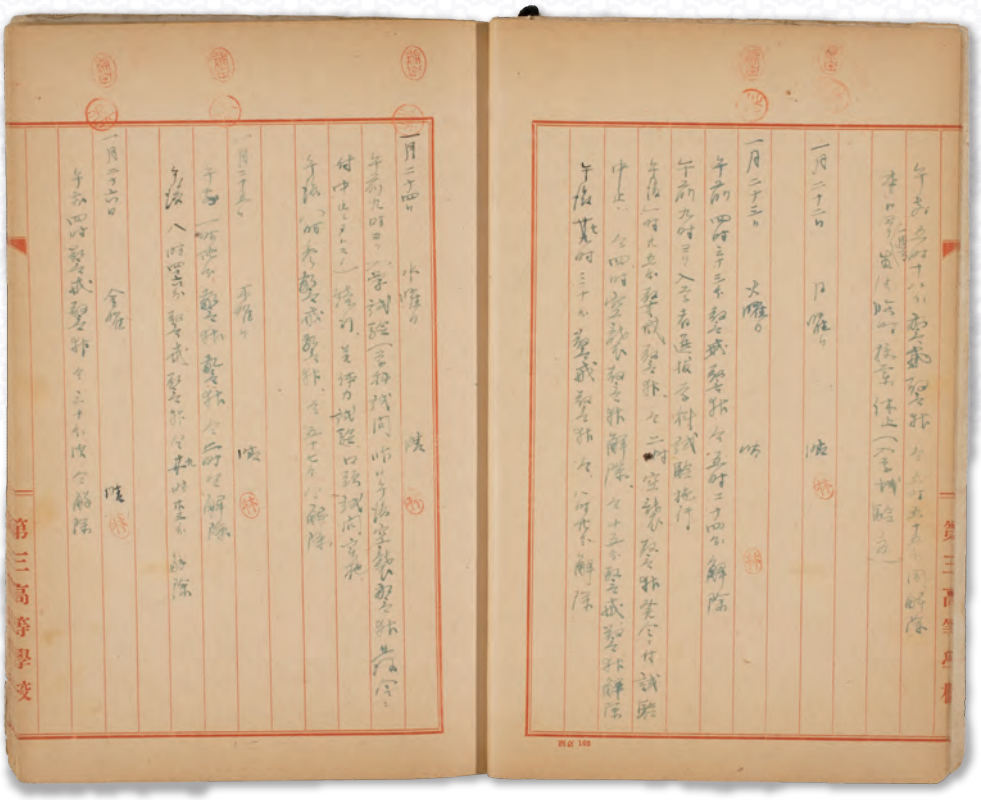
空から見た三高

1946 年撮影の航空写真。三高とその周囲が写っている。右側の建物配置図（1941 年度）と見比べると位置関係がわかる。



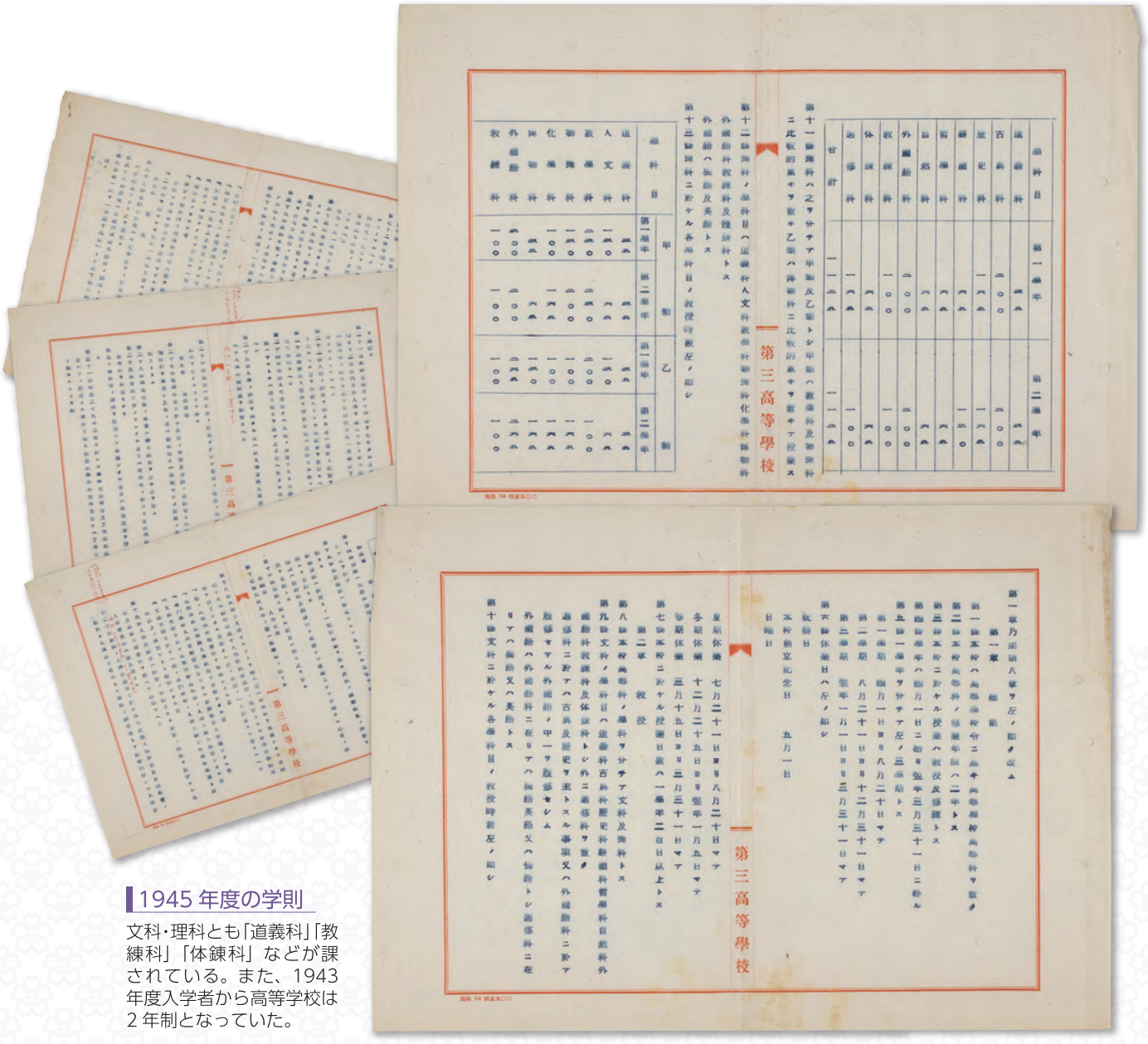
勤労動員に関する史料

いずれも 1944 年 11 月に現在の京都府八幡市周辺で行われたときの史料。生徒持参の書籍リストには、理科の生徒らしい教科書もあるが、文学書も目立つ。



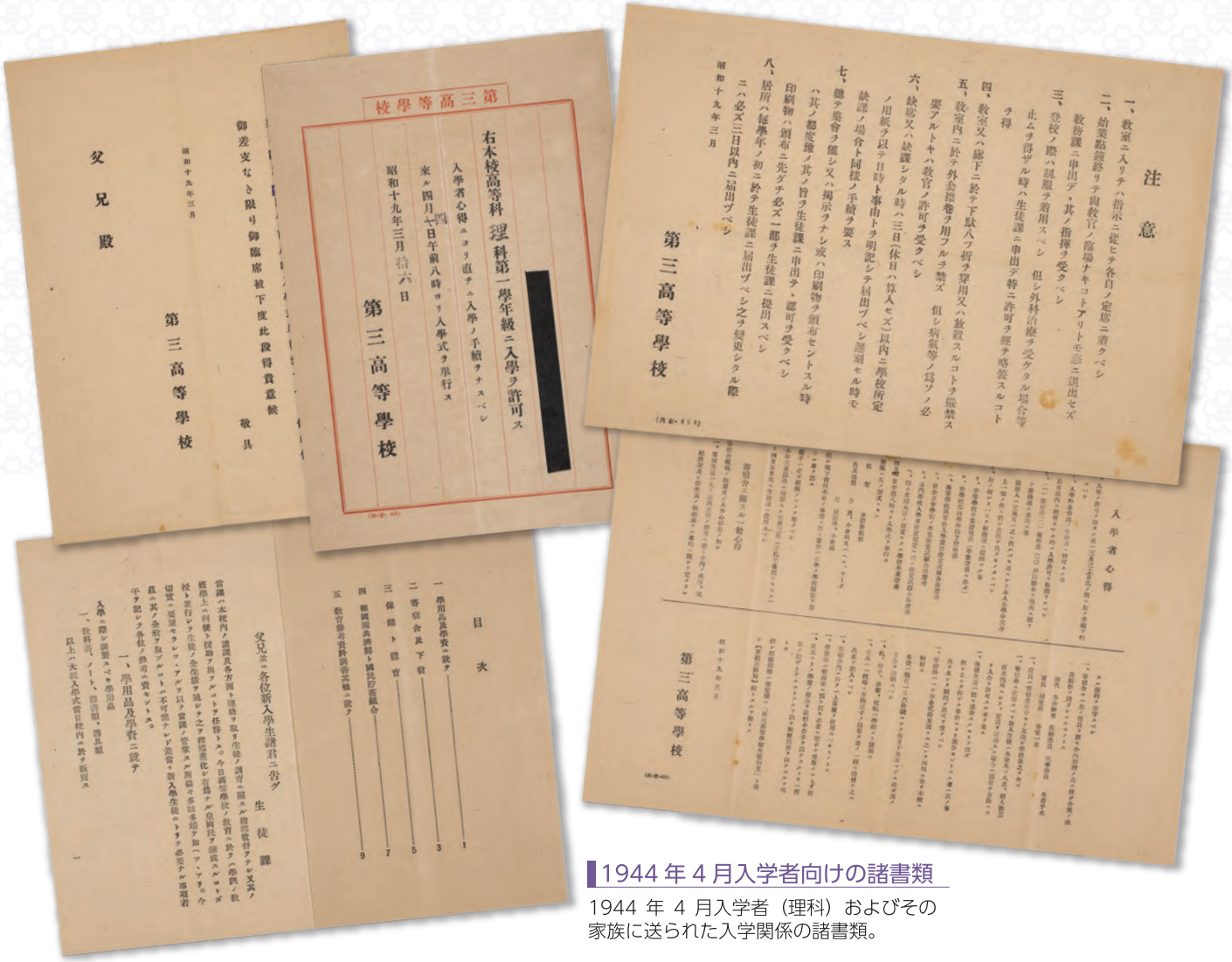
空襲警報下での入試実施

1945 年度の三高入学志願者を対象とした入学試験は 1 月 23 日に実施されたが、この日の午後 2 時に空襲警報が発令されたため一旦中断、翌 24 日に再開された。三高の『日誌』にその様子が記録されている。



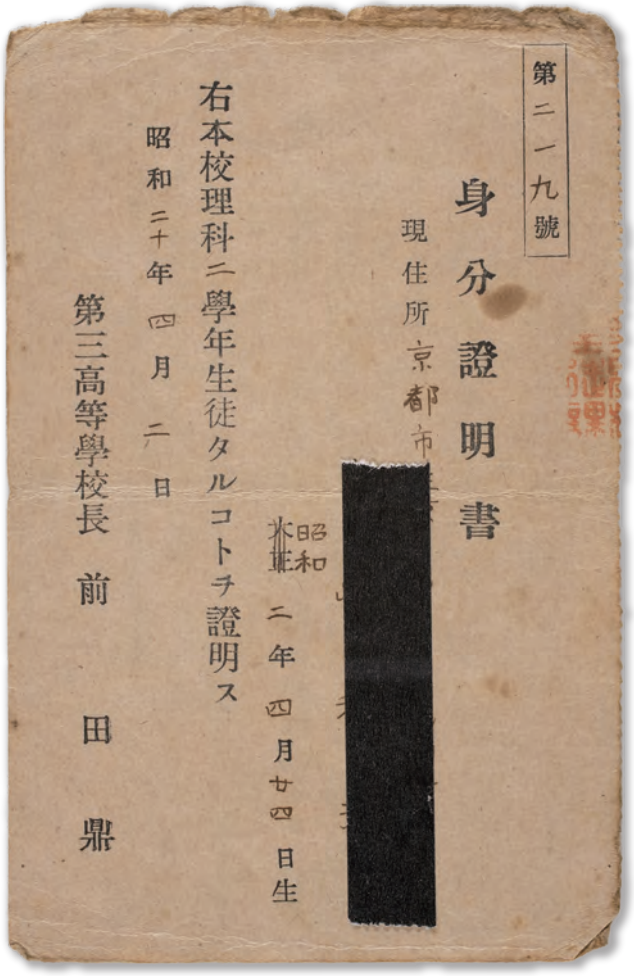
1945 年度の学則

文科・理科とも「道義科」「教練科」「体錬科」などが課されている。また、1943 年度入学者から高等学校は 2 年制となっていた。



1944 年 4 月入学者向けの諸書類

1944 年 4 月入学者（理科）およびその家族に送られた入学関係の諸書類。

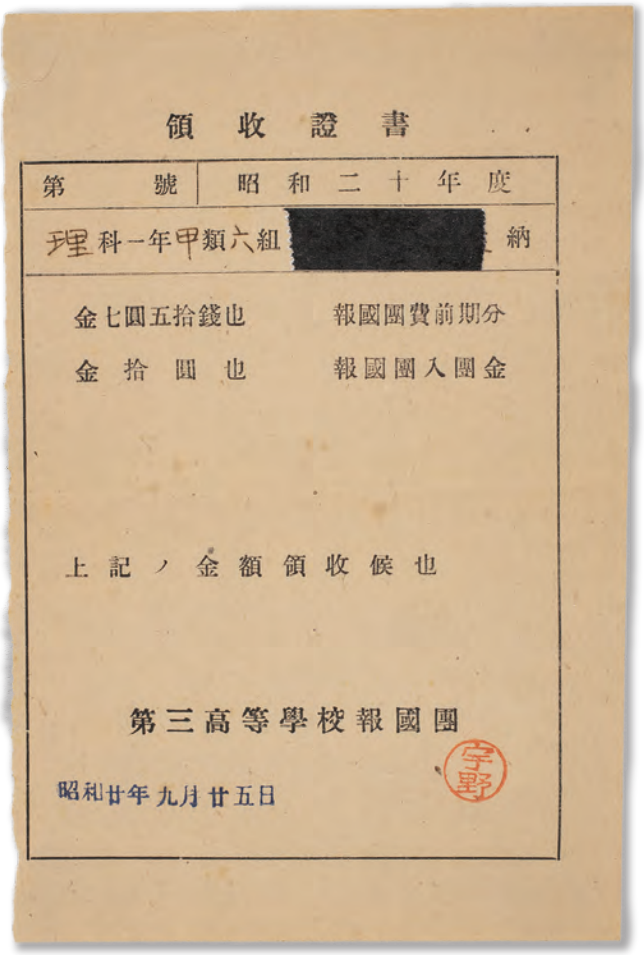


身分証明書

1945 年 4 月に理科二年に進級した三高生のもの。

報国団費領収証書

報国団とは、中等学校以上の各学校に設けられた修練組織で全職員・学生生徒を構成員とした。三高では 1940 年 11 月に置かれ、それとともに従来の校内団体は解消された。この領収証書は、敗戦後の 1945 年 9 月 25 日付で報国団解散直前のもの。



領　収　証　書

第　　號	昭和二十年度
理科一年甲類六組 [redacted] 納	

分期前費國報　　金四五拾錢也

金國入國報　　金拾圓也

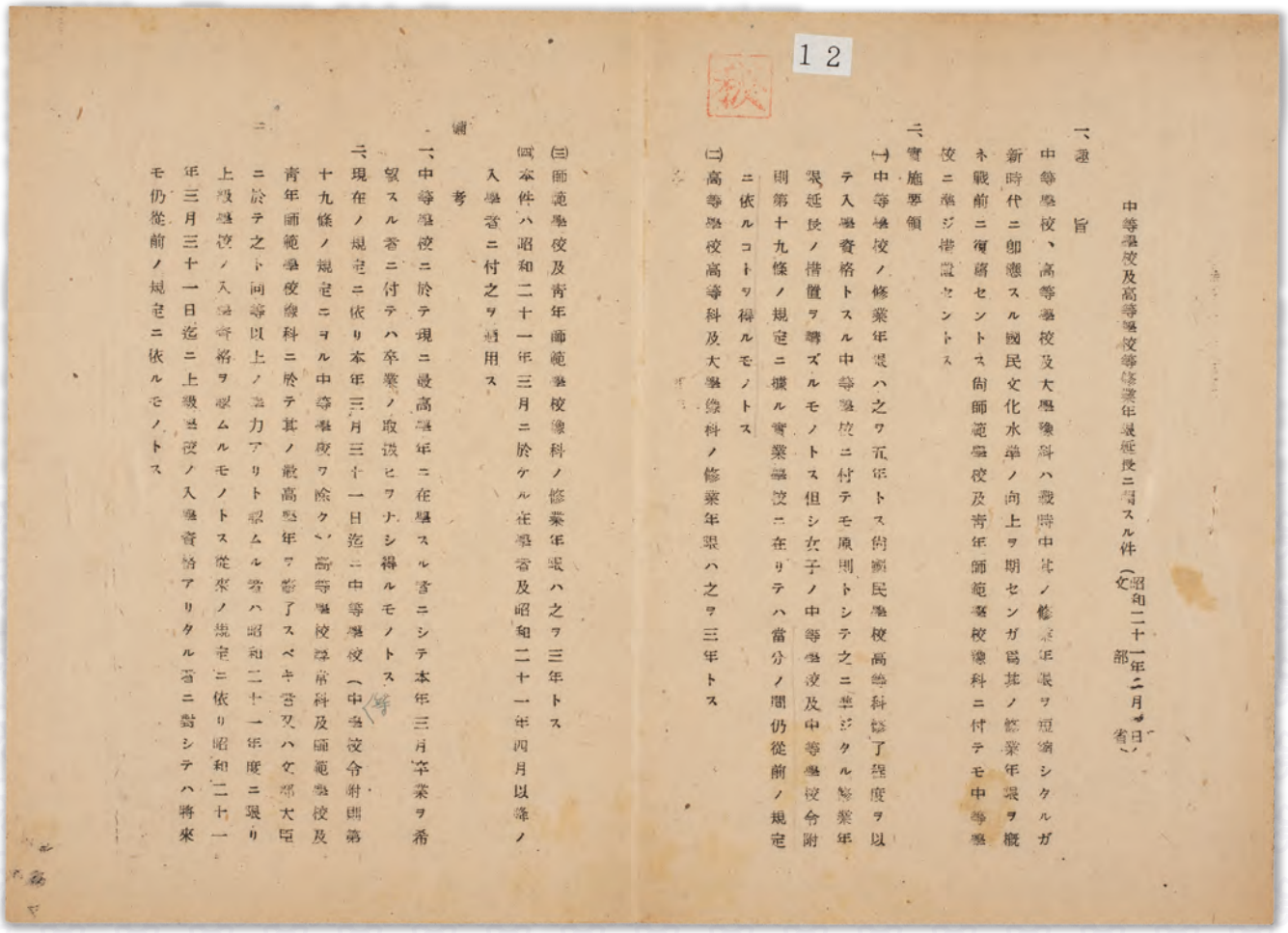
上記ノ金額領收候也

第三高等學校報國團

昭和廿年九月廿五日

修業年限延長に関する史料

1943 年度入学生から修業年限が 2 年に短縮されていた高等学校は、敗戦後の 1946 年 2 月に従来の 3 年制に戻された。1946 年 3 月に卒業するはずだった生徒は、急遽年限が 1 年延長され、翌 1947 年の卒業となった。



12

中等學校及高等學校等修業年限延長ニ關スル件（昭和二十一年二月　日　文部省）

一、趣旨

中等學校、高等學校及大學豫科ハ戰時中其ノ修業年限ヲ短縮シタルガ新時代ニ即應スル國民文化水準ノ向上ヲ期センガ爲其ノ修業年限ヲ概ネ戰前ニ復歸セントス尙師範學校及青年師範學校豫科ニ付テモ中等學校ニ準ジ措置セントス

二、實施要領

(一)中等學校ノ修業年限ハ之ヲ五年トス尙師範學校高等科修了程度ヲ以テ入學資格トスル中等學校ニ付テモ原則トシテ之ニ準ジタル修業年限延長ノ措置ヲ講ズルモノトス但シ女子ノ中等學校及中等學校令附則第十九條ノ規定ニ據ル實業學校ニ在リテハ當分ノ間仍從前ノ規定ニ依ルコトヲ得ルモノトス

(二)高等學校高等科及大學豫科ノ修業年限ハ之ヲ三年トス

(三)師範學校及青年師範學校豫科ノ修業年限ハ之ヲ三年トス

(四)本件ハ昭和二十一年三月ニ於ケル在學者及昭和二十一年四月以降ノ入學者ニ付之ヲ適用ス

備考

一、中等學校ニ於テ現ニ最高學年ニ在學スル者ニシテ本年三月卒業ヲ希望スル者ニ付テハ卒業ノ取扱ヒヲナシ得ルモノトス

二、現在ノ規定ニ依リ本年三月三十一日迄ニ中等學校（中學校令附則第十九條ノ規定ニヨル中等學校ヲ除ク）高等學校尋常科及師範學校及青年師範學校豫科ニ於テ其ノ最高學年ヲ修了スベキ者又ハ文部大臣ニ於テ之ト同等以上ノ學力アリト認ムル者ハ昭和二十一年度ニ限リ上級學校ノ入學資格ヲ與ムルモノトス從來ノ規定ニ依リ昭和二十一年三月三十一日迄ニ上級學校ノ入學資格アリタル者ニ對シテハ將來モ仍從前ノ規定ニ依ルモノトス

第二章

戦後の三高生

Postwar Sanko's students

戦争が終わり、勤労動員や学徒出陣で学校を離れていた三高生たちが戻ってきた。授業の再開は九月一七日であった。その後、軍関係や外地などの教育機関で学んでいた生徒の編入があり、戦時中に拡張された理科に入学した生徒のうち希望者は文科への転科が許可された。一九四七（昭和二二）年にはそれまで男子に限定されていた高等学校の入学資格が女子にも拡大し、三高は一九四八年に初の女子生徒を迎えた。

戦時中の総動員体制を支えていた報国団は解体し、それ以前にあった生徒の自主的な校内団体である嶽水会が復活した。それとともに、文化・運動各部の活動が再開され、伝統の一高との対校戦も一九四六年一〇月の野球戦から行われ、一九四八年には庭球・陸上・水上・野球の四部すべてで勝利を収めた（学制改革のため、これが最後の一高戦になった）。創立記念祭とともに行われ、名物行事であった運動会も一九四六年に復活した。

厳しい食糧難やインフレといった生活苦に苛まれながらも、三高生は充実した学園生活を送りはじめていた。

集合写真と独語授業の様子

いずれも理科のクラスのもの。

編入生と転科生

敗戦直後、全国の教育機関が廃止となった軍関係や外地などの教育機関から学生生徒を受け入れたことは知られている。また、高等学校では戦時中に増加した理科の生徒のうち希望者を文科に転科させたことも周知のことである。しかし、そのいずれも学校ごとの実態はほとんど分かっていない。大学文書館では、本展示の開催にあたって所蔵している資料を調査し、三高における具体的な数値を割り出してみた。

一　軍関係教育機関からの編入

敗戦直後の一九四五年八月二八日、陸海軍諸学校の出身者および在学者を国内の教育機関へ優先的に転入学させる方針が閣議決定された。これをうけて三高でも一〇月二〇日から二四日にかけて口頭試問と身体検査を実施して編入生を選考し、一一月一五日に陸軍予科士官学校や海軍兵学校などに在学していた九四名を受け入れた（表1参照）。また、これに先立って、戦時中に三高に入学したがその後陸海軍の学校に入ったため三高入学を取り消された者の復校が九月から一〇月にかけて認められた。その数は二三名に上った（表1の*印）。軍関係教育機関からの編入は一九四六年、一九四七年にも実施され、三高への編入生は一七五名が確認された。

二　日本軍以外の教育機関からの編入

軍関係教育機関以外にも、外地などにあって敗戦により閉鎖された教育機関からも生徒の受入が行われた。一九四六年から一九四九年にかけて、旅順高等学校や旅順工科大学予科、京城帝国大学予科など二一の教育機関から合計九〇名が三高に編入したことが確認された（表2）。

三　理科からの転科

理科からの転科は一九四五年一一月一五日を最初として以後毎年度行われ、合計一〇六名が確認された（表3）。そのほとんどが理科から文科への転科だが、一九四五年には理乙から理甲への転科も一〇名いた。

表1 軍関係教育機関からの編入一覧（教育機関別）

	教育機関名	編入時期	編入先 文科	編入先 理科	時期別人数	機関別合計	
陸軍	陸軍予科士官学校	1945年 9月	0	1	1	25	*
		1945年 10月	0	1	1		*
		1945年 11月	12	7	19		
		1947年 4月	2	1	3		
		不明	0	1	1		
	陸軍士官学校	1945年 11月	3	3	6	8	
		1947年 4月	1	1	2		
	陸軍航空士官学校	1945年 10月	1	0	1	11	*
		1945年 11月	5	3	8		
		1947年 4月	0	2	2		
	陸軍経理学校予科	1945年 11月	3	3	6	8	
		1947年 4月	0	2	2		
	陸軍経理学校	1945年 11月	2	1	3	4	
		1947年 4月	0	1	1		
	陸軍幼年学校	1945年 11月	3	2	5	9	
		1947年 4月	3	1	4		
	陸軍計		35	30	65	65	
海軍	海軍兵学校予科	1945年 11月	1	0	1	6	
		1947年 4月	2	3	5		
	海軍兵学校	1945年 9月	2	8	10	71	*
		1945年 11月	10	23	33		
		1946年 4月	2	8	10		
		1947年 4月	7	9	16		
		不明	0	2	2		
	海軍経理学校予科	1945年 11月	0	1	1	2	
		1947年 4月	1	0	1		
	海軍経理学校	1945年 9月	0	10	10	31	*
		1945年 11月	11	1	12		
		1946年 4月	2	0	2		
		1947年 4月	1	6	7		
	海軍計		39	71	110	110	
総計						175	

軍関係機関からの編入一覧（編入時期別）

編入時期	人数	編入時期	人数
1945年 9月	21*	1946年 4月	12
1945年 10月	2*	1947年 4月	43
1945年 11月	94	不明	3
総計			175

表2 日本軍以外の教育機関からの編入一覧

教育機関名	編入先 文科	編入先 理科	計	教育機関名	編入先 文科	編入先 理科	計
京城帝国大学予科	5	5	10	満洲医科大学	0	1	1
京城帝国大学	0	1	1	満洲国陸軍軍医学校子科	0	1	1
台北高等学校	1	5	6	満洲国陸軍軍医学校	0	1	1
台北帝国大学予科	1	4	5	東亜同文書院予科	2	1	3
旅順工科大学予科	5	13	18	東亜同文書院附属専門部	1	0	1
旅順工科大学	0	1	1	東亜同文書院	2	0	2
旅順高等学校	3	16	19	北京大学	1	0	1
建国大学	5	0	5	南洋学院	2	0	2
新京工業大学	1	0	1	日華学院	1	0	1
奉天工業大学	0	2	2	神宮皇学館大学予科	6	0	6
満洲医科大学予科	0	3	3	合計	36	54	90

表3 理科からの転科一覧

転科時期	入学時期	入学		転科先・入数	計
1945年11月15日	1943年4月	理甲	→	文二甲 3	3
	1944年4月	理甲	→	文一甲 2、文一丙 1、文二甲 14、文二乙 12	29
		理乙	→	文二乙 5	5
	1945年4月	理甲	→	文一甲 7、文一乙 11、文一丙 12	30
		理乙	→	文一甲 2、文一乙 6、文一丙 6、理一甲 10	24
1946年 6月 7日	1944年4月	理甲	→	文三甲 1、文三乙 1	2
	1945年4月	理甲	→	文二乙 2	2
		理乙	→	文二乙 2	2
1947年 4月21日	1944年4月	理甲	→	文三甲 1、文三乙 1	2
	1945年4月	理甲	→	文二甲 1、文二丙 1、文三乙 1	3
		理乙	→	文二乙 1	1
1948年 4月17日	1944年4月	理甲	→	文三乙 1	1
	1945年4月	理甲	→	文三丙 1	1
1949年 4月15日	1945年4月	理乙	→	文三乙 1	1
合計					106

・戦時中理科に入学し、敗戦後に転科した生徒に限定した。

・表中、「理」は理科、「文」は文科を指す。また漢数字は学年、「甲」は英語、「乙」は独語、「丙」は仏語を第一外国語とするクラスを指す。

第 80 回記念祭の様子

1948 年 10 月 30 日から 11 月 3 日までの日程で、第 80 回記念祭が開催された（11 月 3 日に予定されていた運動会は雨のため翌 4 日に順延された）。写真は正門、仮装行列、応援の様子。これが三高最後の記念祭となった。

前略貴殿今般本校ヘ復校願出ノ件諮議ノ結果許可相成候條別紙
注意書熟讀ノ上萬遺漏ナキヤウ準備シ所定ノ期日ニ必ズ出校セラ
レ度此段及通知候

昭和二十年九月六日

第三高等學校教務課

[redacted] 殿

軍学校在校者に対する復校許可

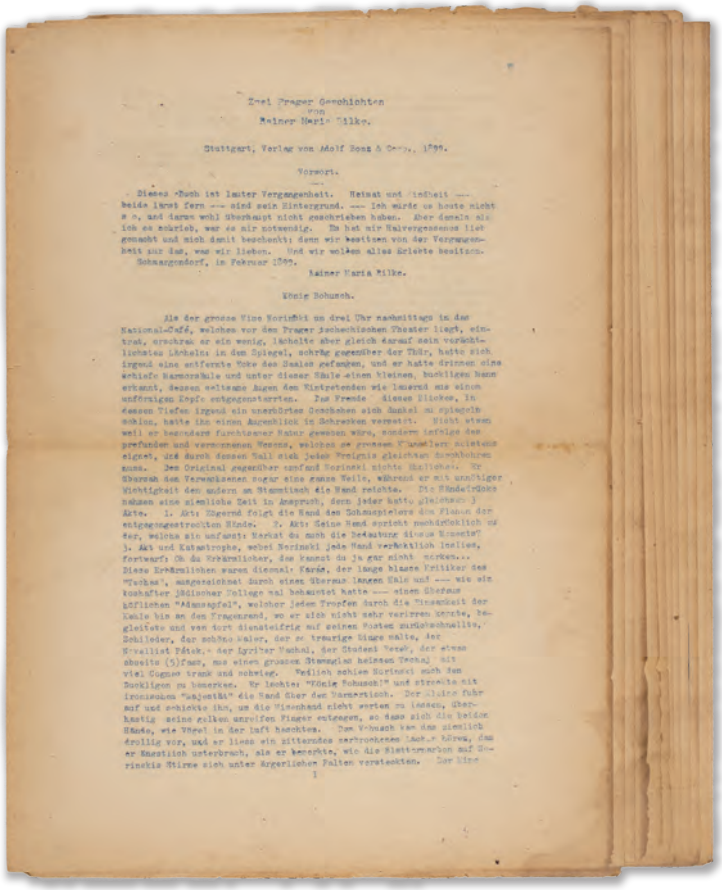
戦時中に三高に入学、その後陸海軍の学校に入ったため三高入学を取り消された者に対する復校許可。1945 年 9 月から 10 月にかけて 23 名の復校が判明している。

陸海軍諸学校からの転入についての通牒

文部省専門教育局長より関係学校に宛て、陸海軍諸学校からの転入を求めた通牒。三高は、第一学年 45 名、第二学年 50 名の定員増加が認められ、その範囲内で受け入れることとされた。なお、選抜は口頭試問と身体検査によるものとされた。

ドイツ語テキスト

高安国世教授の授業で使われたもの。リルケの「プラハの二つの物語」（Zwei Prager Geschichten）。



Zwei Prager Geschichten
von
Rainer Maria Rilke.

Stuttgart, Verlag von Adolf Bonz & Comp., 1899.

Vorwort.

Dieses Buch ist lauter Vergangenheit. Heimat und Jugend — beide lange fern — sind sein Hintergrund. — Ich würde es heute nicht so, und darum wohl überhaupt nicht geschrieben haben. Aber damals als ich es schrieb, war es mir notwendig. Es hat mir Heimvergessenes lieb gemacht und mich damit beschenkt; denn wir besitzen von der Vergangenheit nur das, was wir lieben. Und wir wollen alles Erlebte besitzen.

Schmargendorf, im Februar 1899.

Rainer Maria Rilke.

König Bohusch.

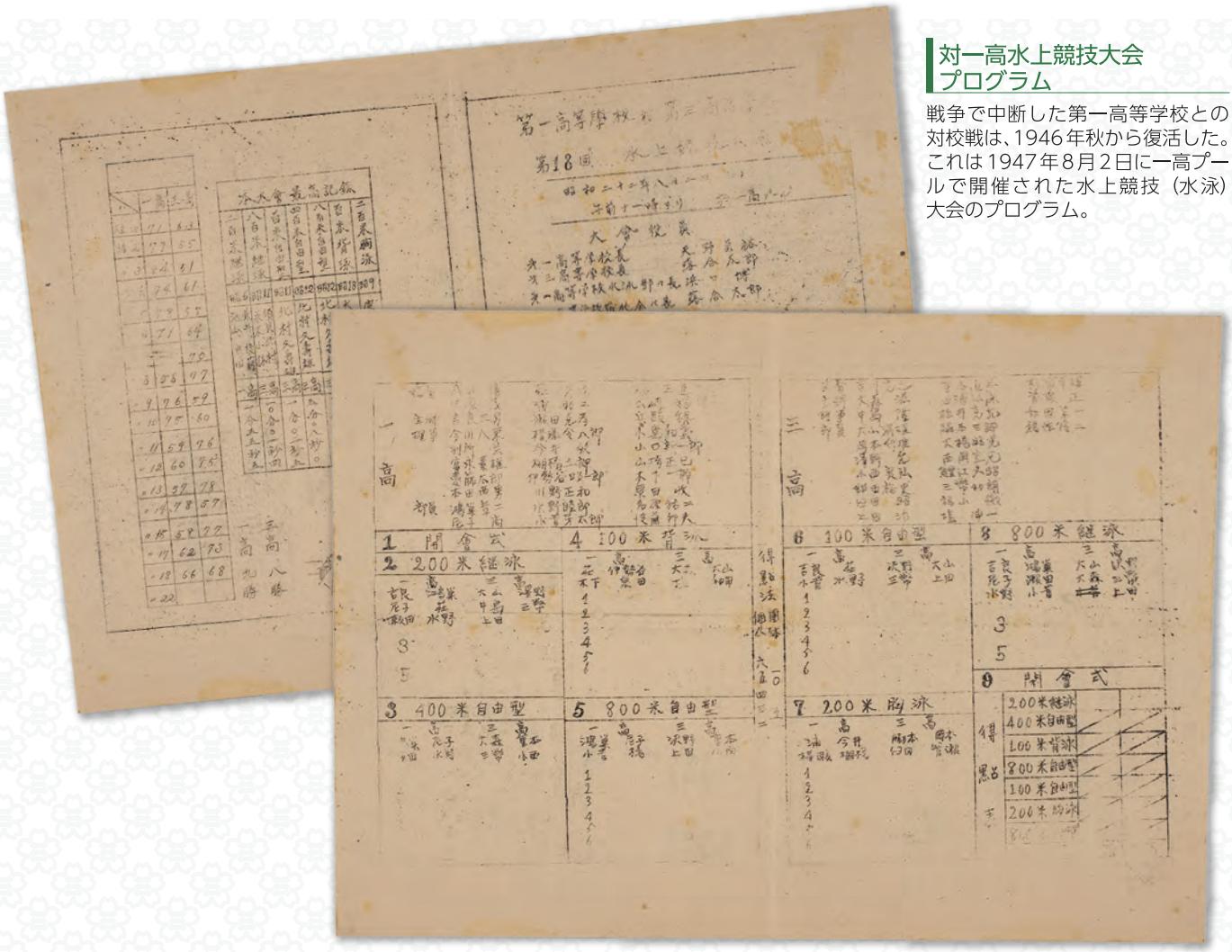
Als der grosse Vino Norinski um drei Uhr nachmittags in das National-Café, welches vor den Prager Tschechischen Theater liegt, eintrat, erschrak er ein wenig, lächelte aber gleich darauf sein verschämtlichstes Lächeln: in dem Spiegel, schräg gegenüber der Thür, hatte sich irgend eine entfernte Tote des Saales gefangen, und er hatte drinnen eine schiefe Marmorsäule und unter dieser Säule einen kleinen, buckligen Mann erkannt, dessen seltsame Augen den Eintretenden wie lauernd aus einem unförmigen Kopfe entgegenstarrten. Das Fremde dieses Blickes, in dessen Tiefen irgend ein unerhörtes Geschehen sich dunkel zu spiegeln schien, hatte ihn einen Augenblick in Schrecken versetzt. Nicht etwa weil er besonders furchtsamer Natur gewesen wäre, sondern infolge des profunden und verworrenen Wesens, welches er grossen Künstlern eigentümlich eignet, die durch dessen Hall sich jeden Ereignis gleichsam durchbohren muss. Im Original gegenüber saß und Norinski nichts Ähnliches. Er überwand den Verwunderten sogar eine ganze Weile, während er mit unnützer Wichtigkeit den andern an Stammtisch die Hand reichte. Die Handelsleute nahmen eine ziemliche Zeit in Anspruch, denn jeder hatte gleichsam 3 Akte. 1. Akt: Zögernd folgt die Hand des Schauspielers dem Flamen der entgegengestreckten Hände. 2. Akt: Seine Hand zerrt rechtschaffen mit der, welche sie umfasst: Merkst du auch die Bedeutung dieses Moments? 3. Akt und Katastrophe, wobei Norinski jede Hand verächtlich liegen liess, fortwarf: Oh du Erbärmlicher, das kannst du ja gar nicht merken...

Diese Erbärmlichen waren diesmal: Karäs, der lange blasse Politiker des "Tschas", ausgezeichnet durch einen Thermus langen Hals und — wie ein boshafter jüdischer Dollage mal behauptet hatte — einen Thermus göttlichen "Adamsapfel", welcher jeden Tropfen durch die Unsauberkeit der Kehle bis an den Fragenrand, wo er sich nicht sehr verirren konnte, begleitete und von dort dienstbeflissen auf seinen Posten zurückschnellte, Schlieder, der schöne Maler, der so traurige Bilder malte, der Kvallist Pätek, der Igriber Nachal, der Student Verf, der etwas abseits (5)fast, was einen grossen Strumpfes heissen Tschaj mit viel Cognac trank und schwieg. Endlich schien Norinski sich den Buckligen zu bemerken. Er lachte: "König Bohusch!" und streckte mit ironischem "Majestät" die Hand über den Tisch hinüber. Der Kleine fuhr auf und schickte ihn, um die Eisenhand nicht ersten zu müssen, Überhastig seine zwölf unreifen Finger entgegen, so dass sich die beiden Hände, wie Räder in der Luft hackten. Das Kbusch war das ziemlich drollig vor, und er liess ein zitterndes zerbrochenes Lachen hören, das er künstlich unterbrach, als er bemerkte, wie die Sternmarken auf Norinskis Stirne sich unter ärgerlichen Falten versteckten. Der Wirt

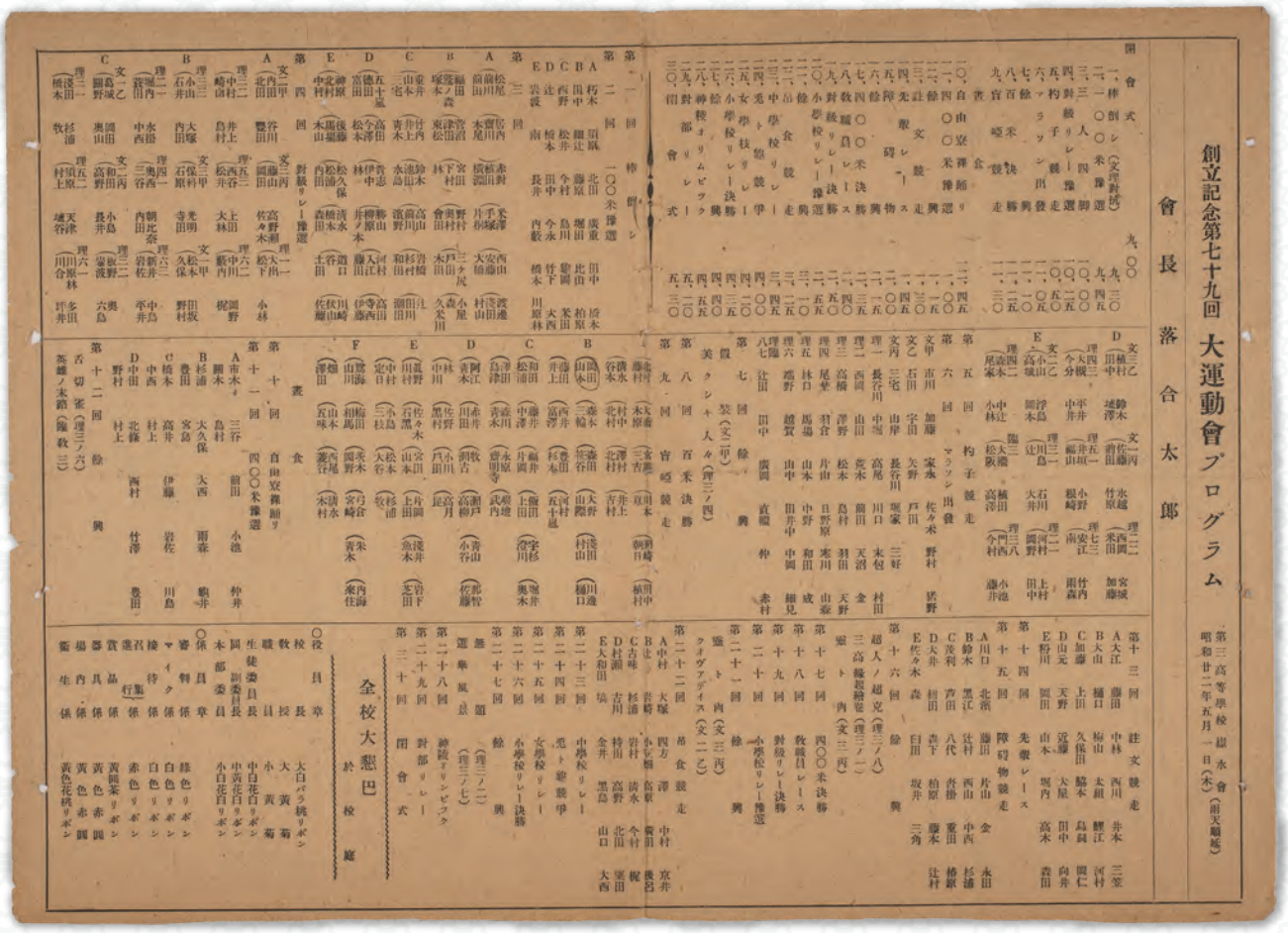
1

対一高水上競技大会プログラム

戦争で中断した第一高等学校との対校戦は、1946年秋から復活した。これは1947年8月2日に一高プールで開催された水上競技（水泳）大会のプログラム。



物理実験テキスト



創立記念第 79 回大運動会プログラム

第 79 回の創立記念式および大運動会は 1947 年 5 月 1 日に催された。各種運動競技のほか、仮装などの余興、自由寮裸踊りなどが行われた。

第三章

戦後教育改革のなかで

In postwar education reform

戦後の教育改革によって従来の学校体系は大きく改編され、いわゆる六・三・三・四制が導入された。そのなかで高等学校については、それまでのような形での維持が不可能であるのは早い段階で分かっていたが、結局各校は同じ都府県にある帝国大学をはじめとした官立大学やその他の官立高等教育機関と合同し、教員たちの多くは新制大学における一般教育を担うことになった。

三高が京都大学と合同する経緯については、確実な史料が見つかっておらず不明の点が多い。ただ、第一高等学校が東京大学と合同して「教養学部」の母体となったのに比較すると、京大で一般教育を担当する組織は「分校」（一九五四年に教養部に改称）であり、自らの学生も持たず自律性の弱いものであった。

一九四九（昭和二四）年五月に京大と合同した三高は、一年間だけ「京都大学第三高等学校」と名乗り、最後の学年が卒業した一九五〇年三月に廃校となった。

寮生一名焼死す

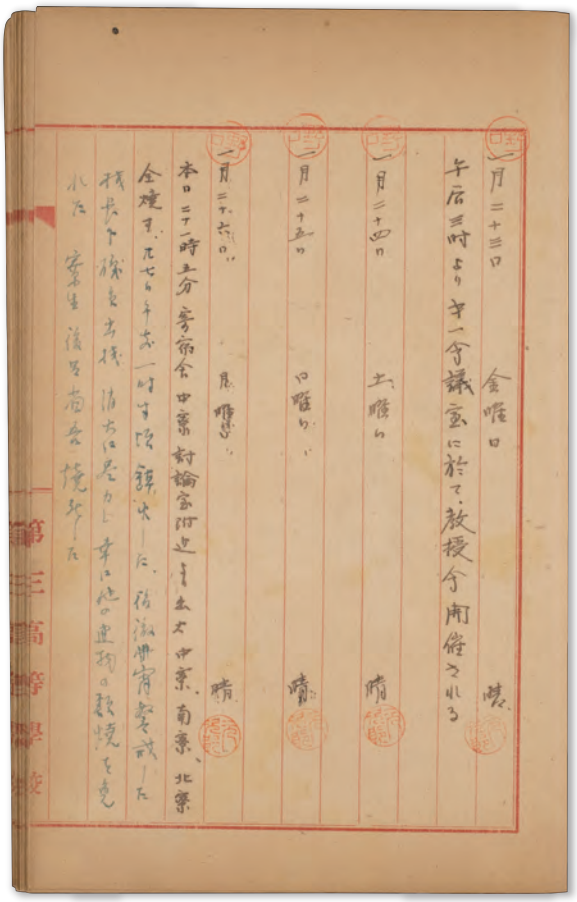
全焼した三高自由寮

寄宿舎の焼失

1948年1月26日夜、三高寄宿舎が全焼し寮生1名が死亡した。失火によるものと考えられている。自由寮と呼ばれていた寄宿舎の焼失は、三高生に大きな衝撃を与えた。左は当時の新聞記事（『京都新聞』1948年1月28日付）、右は焼失前の寄宿舎。

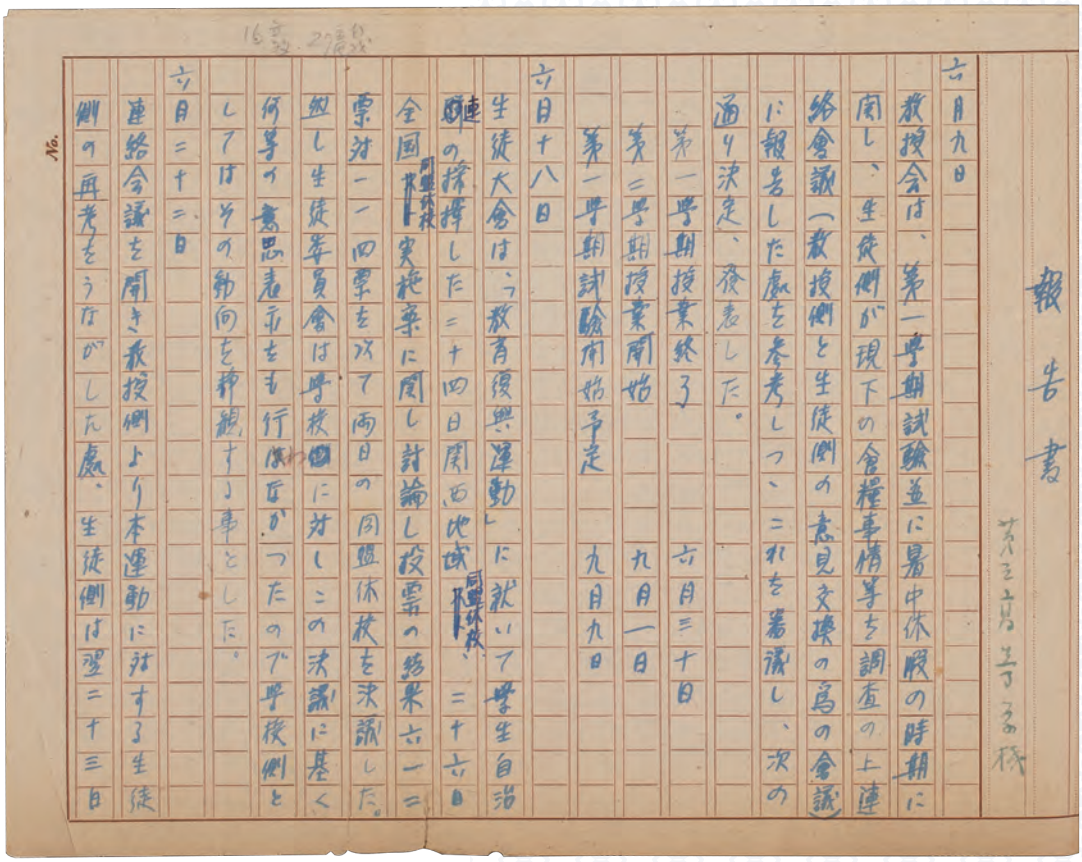
寄宿舎焼失を記した記事

寄宿舎焼失を記した三高の『日誌』。中寮から出火し、4 時間ほどで南寮、北寮と三棟すべてが失われたことが記されている。



帝国大学総長会議での議論を記した史料

戦後の学制改革においては、多様だった戦前の高等教育機関をどのように統合するかが大きな問題の一つだった。この史料は 1947 年 5 月 26 日開催の帝国大学総長会議に出席した鳥養利三郎京大総長が残したメモ。3 枚目に「高等学校ヲ大学ガ抱キ込ム様ニ努ムルコト」との記載が見える。

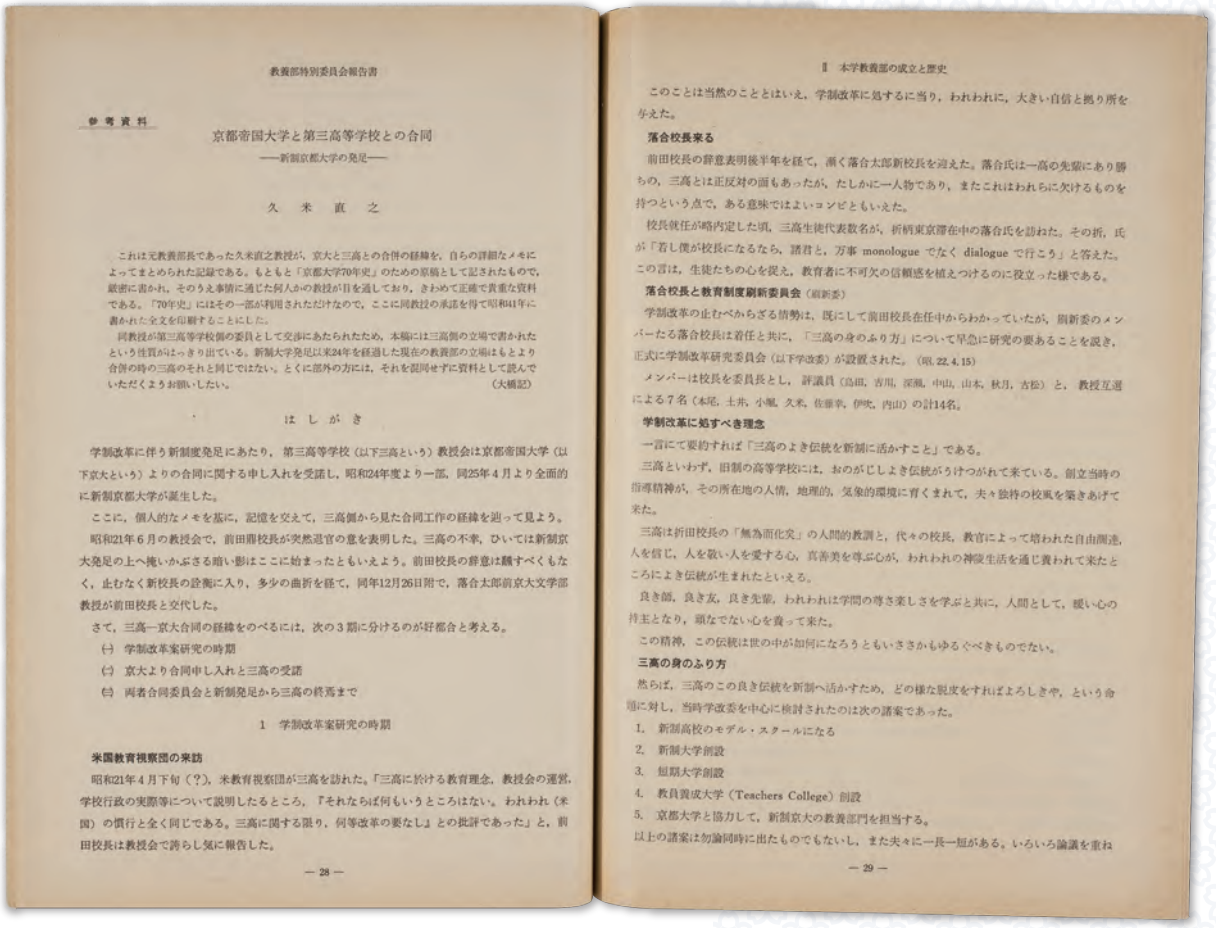


報告書

六月九日
教授会は、第一學期試驗並に暑中休暇の時期に関し、生徒側が現下の倉種事情等を調査の上連絡會議（教授側と生徒側の意見交換の為の會議）に報告した處を參考しつゝ、これを審議し、次の通り決定、發表した。
第一學期授業終了　六月三十日
第二學期授業開始　九月一日
第一學期試驗期日予定　九月九日
六月十八日
生徒大會は、「教育復興運動」に就いて學生自治連の採擇した二十四日関西地区同盟休校、二十六日全国同盟休校実施案に関し討論し投票の結果六一二票対一一四票を以て両日の同盟休校を決議した。
然し生徒等員會は學校側に対しこの決議に基く何等の意思表示をも行はなかつたので學校側としてはその動向を静観する事とした。
六月二十二日
連絡會議を開き教授側より本運動に対する生徒側の再考をうながした處、生徒側は翌二十三日

同盟休校をめぐる報告

敗戦から数年経つと、冷戦が始まった国際環境を背景として、学校管理や占領下で荒廃した学園の復興を求める学生生徒の政治運動が各教育機関で起こってきた。この史料は、三高当局が 1948 年 6 月の三高生による同盟休校（ストライキ）への動きを文部省に報告したもの。結局三高では同盟休校は行われなかった。



教養部特別委員会報告書

参考資料

京都帝国大学と第三高等学校との合同
――新制京都大学の発足――

久米直之

これは元教養部長であった久米直之教授が，京大と三高との合併の経緯を，自らの詳細なメモによってまとめられた記録である。もともと「京都大学70年史」のための草稿として記されたもので，厳密に書かれ，そのうえ事情に通じた何人かの教授が目を通しており，きわめて正確で貴重な資料である。「70年史」にはその一部が利用されただけなので，ここに同教授の承諾を得て昭和41年に書かれた全文を印刷することにした。

同教授が第三高等学校側の委員として交渉にあたられたため，本稿には三高側の立場で書かれたという性質がはっきり出ている。新制大学発足以来24年を経過した現在の教養部の立場はもとより合併の時の三高のそれとも同じではない。とくに部外の方には，それを混同せずに資料として読んでいただくようお願いしたい。（大橋記）

はしがき

学制改革に伴う新制度発足にあたり，第三高等学校（以下三高という）教授会は京都帝国大学（以下京大という）よりの合同に関する申し入れを受諾し，昭和24年度より一部，同25年4月より全面的に新制京都大学が誕生した。

ここに，個人的なメモを基に，記憶を交えて，三高側から見た合同工作の経緯を辿って見よう。

昭和21年6月の教授会で，前田鼎校長が突然退官の意を表明した。三高の不幸，ひいては新制京大発足の上へ掩いかぶさる暗い影はここに始まったともいえよう。前田校長の辭意は翻すべくもなく，止むなく新校長の詮衡に入り，多少の曲折を経て，同年12月26日附で，落合太郎前京大文学部教授が前田校長と交代した。

さて，三高―京大合同の経緯をのべるには，次の３期に分けるのが好都合と考える。

(一) 学制改革案研究の時期
(二) 京大より合同申し入れと三高の受諾
(三) 両者合同委員会と新制発足から三高の終焉まで

1　学制改革案研究の時期

米国教育視察団の来訪

昭和21年４月下旬（?），米教育視察団が三高を訪れた。『三高に於ける教育理念，教授会の運営，学校行政の実際等について説明したところ，『それならば何もいうところはない。われわれ（米国）の慣行と全く同じである。三高に関する限り，何等改革の要なし』との批評であった」と，前田校長は教授会で誇らし気に報告した。

— 28 —

II　本学教養部の成立と歴史

このことは当然のこととはいえ，学制改革に処するに当り，われわれに，大きい自信と拠り所を与えた。

落合校長来る

前田校長の辭意表明後半年を経て，漸く落合太郎新校長を迎えた。落合氏は一高の先輩にあり勝ちの，三高とは正反対の面もあったが，たしかに一人物であり，またこれはわれらに欠けるものを持つという点で，ある意味ではよいコンビともいえた。

校長就任が略内定した頃，三高生徒代表数名が，折柄東京滞在中の落合氏を訪ねた。その折，氏が「若し僕が校長になるなら，諸君と，万事 monologue でなく dialogue で行こう」と答えた。この言は，生徒たちの心を捉え，教育者に不可欠の信頼感を植えつけるのに役立った様である。

落合校長と教育制度刷新委員会（刷新委）

学制改革の止むべからざる情勢は，既にして前田校長在任中からわかっていたが，刷新委のメンバーたる落合校長は着任と共に，「三高の身のふり方」について早急に研究の要あることを説き，正式に学制改革研究委員会（以下学改委）が設置された。（昭. 22. 4. 15）

メンバーは校長を委員長とし，評議員（島田，吉川，深瀬，中山，山本，秋月，吉松）と，教授互選による７名（本尾，土井，小堀，久米，佐藤平，伊吹，内山）の計14名。

学制改革に処すべき理念

一言にて要約すれば「三高のよき伝統を新制に活かすこと」である。

三高といわず，旧制の高等学校には，おのがじしよき伝統がうけつがれて来ている。創立当時の指導精神が，その所在地の人情，地理的，気象的環境に育くまれて，夫々独特の校風を築きあげて来た。

三高は折田校長の「無為而化究」の人間的教訓と，代々の校長，教官によって培われた自由闊達，人を信じ，人を敬い人を愛する心，真善美を尊ぶ心が，われわれの神寮生活を通じ養われて来たところによき伝統が生まれたといえる。

良き師，良き友，良き先輩，われわれは学問の尊さ楽しさを学ぶと共に，人間として，暖い心の持主となり，頑なでない心を養って来た。

この精神，この伝統は世の中が如何になろうともいささかもゆるぐべきものでない。

三高の身のふり方

然らば，三高のこの良き伝統を新制へ活かすため，どの様な脱皮をすればよろしきや，という命題に対し，当時学改委を中心に検討されたのは次の諸案であった。

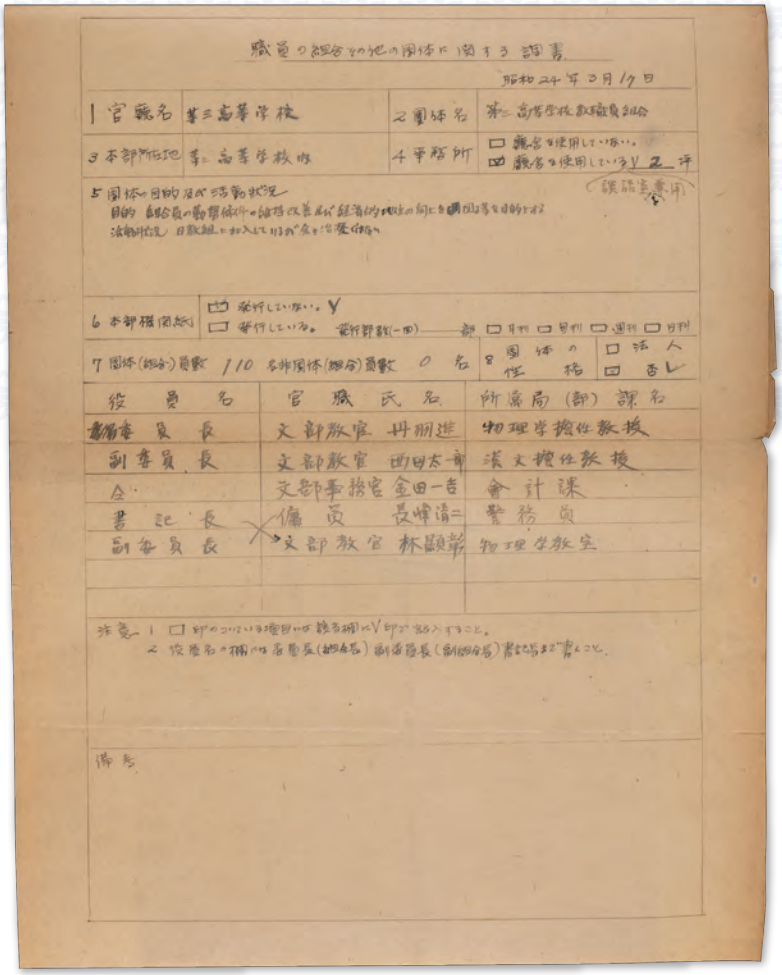
1. 新制高校のモデル・スクールになる
2. 新制大学創設
3. 短期大学創設
4. 教員養成大学（Teachers College）創設
5. 京都大学と協力して，新制京大の教養部門を担当する。

以上の諸案は勿論同時に出たものでもないし，また夫々に一長一短がある。いろいろ論議を重ね

— 29 —

京大との合同の経緯を記した史料

京大と三高の合同経緯については、まとまった文書が残っていない。この史料は、当時三高教授でのち京大教養部長も務めた久米直之が 1967 年刊行の『京都大学七十年史』編纂の参考として記したもの。「旧制高等学校の良き伝統、良き精神」が新制大学に活かされることがあまりに少なかったとしている。



職員の組合その他の団体に関する調書

昭和24年3月17日

1 官職名	第三高等学校	2 団体名	第三高等学校教職員組合
3 本部所在地	第三高等学校内	4 事務所	□ 職舎を使用していない。 ☒ 職舎を使用している V 2 坪

5 団体の目的及び活動の状況
目的 組合員の勤務条件の改善及び経済的地位の向上を図ることを目的とする
活動状況 日教組に加入して日が浅く活発ではない

（議員等兼職）

6 本部機関紙 □ 発行していない。V □ 発行している。 発行部数(一回) 部 □ 日刊 □ 月刊 □ 週刊 □ 旬刊

7 団体(組合)員数 110 名非団体(組合)員数 0 名 8 団体の性格 □ 法人 □ 否 レ

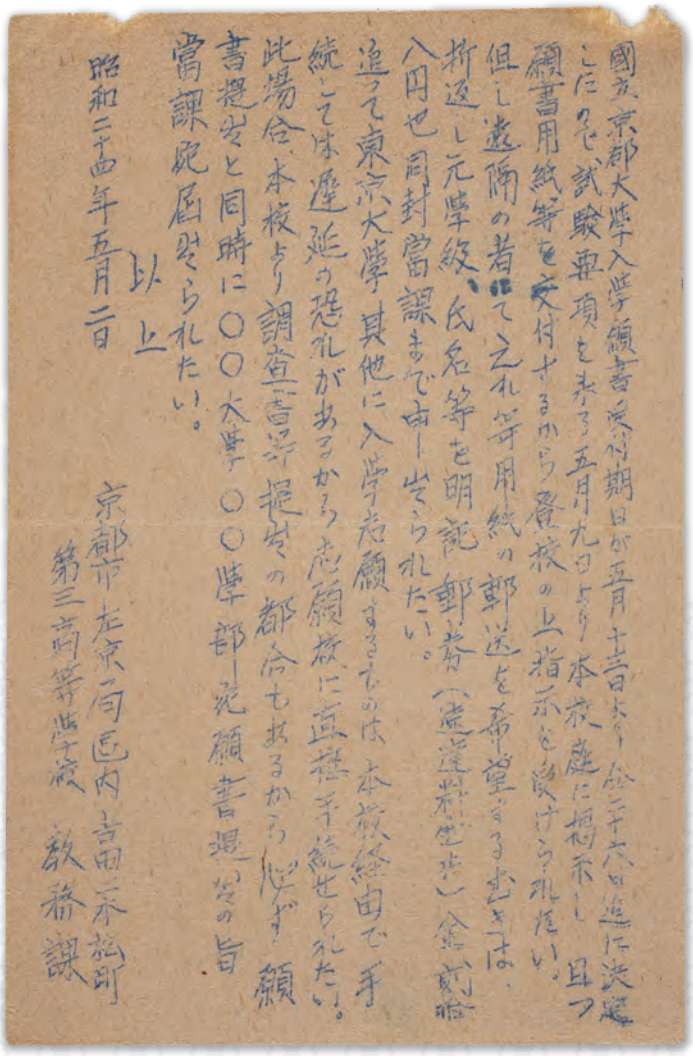
役員名	官職氏名	所属局(部)課名
委員長	文部教官 井上清	物理学担任教授
副委員長	文部教官 田中太郎	漢文担任教授
〃	文部事務官 金田一吉	会計課
書記長	傭員 長峰清二	警務員
副委員長	文部教官 林顕彰	物理学教室

注意 1 □印のついている項目には該当欄にV印が記入すること。
2 役員名の欄には委員長(組合長)副委員長(副組合長)書記長まで書くこと。

備考

教職員組合に関する調書

三高でも、廃校までの短期間ではあったが教職員組合が結成された。



國立京都大學入學願書受付期日が五月十三日より六日迄に決定したので試驗要項を來る五月九日より本校廳に掲示し且つ願書用紙等を交付するから登校の上指示を受けられたい。
但し遠隔の者にて之れ等用紙の郵送を希望する者は折返し元學級氏名等を明記郵券（速達料金共）金貳拾八円也同封當課まで由申出られたい。
追って東京大學其他に入學志願するものは本校經由で手續して遅延の恐れがあるから志願校に直接手続せられたい。
此場合本校より調査書等提出の都合もあるから必ず願書提出と同時に〇〇大學〇〇學部宛願書選送の旨當課宛屆出られたい。
以上
昭和二十四年五月二日
京都市左京区内高田二本松町
第三高等学校　教務課

京都大学入学願書交付に関する通知

新制大学は1949年5月に発足することになるが、この史料はその新制京大の入学願書を三高で交付する旨記した通知。旧制高等学校第 1 学年修了者が、新制大学の第 1 期に進学することができた。

三高解散式後のファイヤーストーム

1950 年 3 月 31 日午後 5 時から三高の解散式が行われ、校銘板が降ろされた。その後、グラウンドにファイヤーストームが焚かれ、三高関係者は廃校を惜しんだ。

同窓会の活動

三高同窓会は 1928 年につくられ、三高の廃校後組織を改編させた。会報や名簿、三高歌集の発行などのほか、各地に支部もあり、2013 年の解散まで卒業生の強いつながりのもと、盛んに活動した。展示しているのは、『会報』の第 1 号、改編後最初の号、創立 100 年記念号、および『三高歌集』（1952 年版）。

會報
昭和四年六月
第一號
會報
三高同窓會
1951
會報
33
三高創立100年号
1968
三高同窓會

生徒定員数の変遷

従来は文科・理科同数であった入学定員が、理科の方が多くなるのは1942年度入学生からである。この理系を多くした定員数は結局廃校まで変わらなかった。1943年度入学生は、2年で卒業したため、1945年度の3年生は存在しない。また、1948年度入学生は1949年度には新制大学の1年に進学し、1949年度の高等学校は新入生を迎えなかったため、この年の1年生・2年生は存在しない。

年度	1年			2年			3年			総計
	文科	理科	計	文科	理科	計	文科	理科	計	
1944	80	240	320	160	240	400	160	240	400	1120
1945	120	320	440	80	240	320	−	−	−	760
1946	120	240	360	120	320	440	80	240	320	1120
1947	120	240	360	120	240	360	120	320	440	1160
1948	120	240	360	120	240	360	120	240	360	1080
1949	−	−	−	−	−	−	120	240	360	360

教員の変遷（1948～1949年）

ここでは、公文書に残る廃校間近の第三高等学校教員の変遷を表示した。新制京都大学発足（1949年5月）により、三高の教員は、三高に残留する者（②）と京都大学の分校に赴任する者（参考）に一旦分かれたが、翌年の三高廃校によって②の教員の多くが1年遅れで分校に赴任した。

① 1948年8月5日現在

担当	職	氏名
数学	教授	杉谷岩彦
国語	教授	島田退蔵
独語	教授	内山貞三郎
物理	教授	吉川泰三
英語	教授	深瀬基寛
英語	教授	山本修二
仏語	教授	伊吹武彦
数学	教授	佐藤三郎
独語	教授	古松貞一
哲学兼倫理	教授	佐藤幸治
独語	教授	杉山産七
数学	教授	小堀憲
英語	教授	石田英二
仏語	教授	生島遼一
独語	教授	石川敬三
物理	教授	丹羽進
物理	教授	多田政忠
東洋史	教授	羽田明
英語	教授	村上至孝
化学	教授	藤田慎三郎
図画	教授	池田総一郎
国語	教授	池上禎造
漢文	教授	西田太一郎
独語	教授	高安国世
数学	教授	奥川光太郎
数学	教授	中桐胤長
化学	教授	八木三郎
植物	教授	久米直之
西洋史	教授	中山治一
物理	教授	本尾一郎
社会	教授	武藤一雄
独語	教授	田川基三
英語	教授	大浦幸男
英語	教授	山内邦臣
化学	教授	加古三郎
独語	教授	谷友幸
物理	教授	三谷健次
動物	教授	吉井良三
国語	教授	阪倉篤義
数学	教授	桑垣煥
仏語	教授	本城格
哲学概説	教授	上田泰治
体操		太田喜一郎
生物実験		大久保好章
物理実験		林顕彰
地質鉱物	講師	江原真伍
漢文	講師	佐藤広治
英語	講師	ジョン・チャールズ・マレット
独語	講師	三浦アンナ
日本史	講師	横田健一
地理	講師	河野通博
数学	講師	秋月康夫
独語	講師	大山定一
哲学	講師	大島康正
社会	講師	山崎武雄
倫理	講師	安部晴之助
英語	講師	中西信太郎
体操	講師	朝隈善郎

・『文部省学校教育局往復書類 昭和二十三年度』より作成。

② 1949年10月1日現在

担当	職	氏名
国語	教授	島田退蔵
物理	教授	吉川泰三 *
英語	教授	山本修二
仏語	教授	伊吹武彦
数学	教授	佐藤三郎 *
心理	教授	佐藤幸治 *
独語	教授	古松貞一 *
独語	教授	石川敬三 *
仏語	教授	生島遼一 *
仏語	教授	本城格 *
物理	教授	多田政忠 *
英語	教授	村上至孝 *
図画	教授	池田総一郎 *
漢文	教授	西田太一郎 *
数学	教授	奥川光太郎 *
化学	教授	八木三郎 *
生物	教授	久米直之 *
社会学	教授	武藤一雄 *
英語	教授	大浦幸男 *
英語	教授	山内邦臣 *
化学	教授	加古三郎 *
物理	教授	三谷健次 *
数学	教授	桑垣煥 *
哲学	教授	上田泰治 *
哲学	教授	辻村公一 *
西洋史	教授	豊田堯 *
独語	教授	前川誠郎 *
体育	助教授	太田喜一郎
生物実験	助教授	大久保好章
物理実験	助教授	林顕彰
外国語	講師	植野修司
数学	講師	河合良一郎
生物	講師	石橋栄達
英語	講師	ヂョン・チャールズ・ミュレット
体育	講師	朝隈善郎

・『学校官衙往復書類　昭和二十四年度』などより作成。
・＊印は三高廃校後京都大学分校に赴任。
・山本修二と伊吹武彦は京大分校教授を兼任。

（参考）京都大学分校 1949年10月1日現在

担当	職	氏名
英語	教授	深瀬基寛
英語	教授	山本修二
仏語	教授	伊吹武彦
化学	教授	木村作治郎 *
独語	教授	古松貞一
英語	教授	宮西光雄 *
英語	教授	山崎正雄 *
化学	教授	藤田慎三郎
地学	教授	小畠信夫 *
物理学	教授	四手井綱彦 *
数学	教授	小堀憲
生物	教授	本城市次郎 *
心理学	教授	和田陽平 *
東洋史	教授	羽田明
国語	教授	池上禎造
経済学	教授	山岡亮一 *
社会学	教授	姫岡勤
独語	助教授	杉山産七
物理学	助教授	田原秀一 *
英語	助教授	山村武雄 *
独語	助教授	田川基三
化学	助教授	吉田清史 *
物理学	助教授	丹羽進
英語	助教授	中野正順 *
化学	助教授	工楽英司 *
独語	助教授	臼井竹次郎 *
独語	助教授	森川晃郷 *
数学	助教授	久保忠雄 *
独語	助教授	高安国世
生物学	助教授	吉井良三
英語	助教授	川田周雄 *
独語	助教授	谷友幸
独語	助教授	吉田次郎 *
人文地理学	助教授	藤岡謙二郎 *
仏語	助教授	林憲一郎 *
数学	助教授	塹江誠夫 *
仏語	助教授	渡辺明正 *
英語	助教授	菅泰男 *
体育理論	助教授	丹生治夫 *
国文学	助教授	阪倉篤義
数学	助教授	桑垣煥
政治学	助教授	岡田良夫 *
数学	助教授	吉沢太郎 *
独語	助教授	佐野利勝 *
数学	助教授	林久三 *
独語	講師	三浦アンナ
生物	講師	平野実
英語	講師	松本泉
数学	講師	大西英一
体育	講師	宮本潔
化学	助手	中村舜吉
生物	助手	天野宏
体育	助手	佐々木美智生
物理	助手	矢野淑郎
体育	助手	大原親
心理	助手	牧康夫
体育	助手	村上長雄

・『学校官衙往復書類 昭和二十四年度』より作成。
・＊印は第三高等学校以外からの赴任。

年表（1944 年 4 月～ 1950 年 3 月）

年	月	日	事　　項
1944	5	1	第 76 回創立記念式挙行、時局の関係上運動会等を挙行せず。
	5	20	3 年生徒全部、勤労動員のため大阪造兵廠に出動。
	5	28	2 年、廠営訓練のため饗庭野へ出向（～ 5 月 31 日）。
	6	17	1 年、勤労動員のため京都府天田郡などへ出発。理科 2 年、滋賀県下で暗渠排水工事作業のため出発。
	8	18	理科 2 年、勤労動員のため大阪市へ出発。
	9	2	文科 1 年、勤労動員のため大阪市へ出発。
	11	10	理科 1 年など、勤労動員のため京都府八幡町・有智郷村へ出発。
1945	1	17	臨時教員養成所 1・2 年、大久保の国際航空会社に出動。
	1	19	文科 1 年、この日より島津製作所に出動。
	1	23	入学者選抜学科試験施行。空襲警報発令のため中断、24 日続行。
	4	8	理科 2 年甲類 183 名、この日より大阪住友伸銅所に出動。
	4	8	理科 2 年乙類 63 名、この日より京都桂三菱重工業に出動。
	7	23	新徳館において文科 1 年の入学式挙行。
	7	24	寺田村島津竹工場において文科 1 年の受入式挙行。
	7	24	三高生が勤労動員中の大阪住友伸銅所に大規模な空襲。
	8	15	政府、ポツダム宣言の受諾を発表。
	9	17	始業式挙行。
	10	20	転入学者試験施行（～ 24 日）。
	11	15	転入学者の入学宣誓式挙行。
1946	2	22	高等学校令中改正公布。従前の 3 年制に復帰。
	3	19	米国教育使節団来校。
	3		嶽水会復活。
	9	14	入学式挙行。
	11	10	第 78 回創立記念式挙行、引き続き運動会実施。
	12	26	前田鼎校長退任、落合太郎校長に就任。
1947	2	3	三高消費組合発令式挙行。
	3	31	学校教育法公布。6・3・3・4 の新学制規定。
	4	15	学制改革研究委員会設置。
	4	21	入学式挙行。
	5	1	第 79 回創立紀念式挙行、引き続き運動会実施。
	11	10	三高文化祭実施（～ 16 日）。
	12	21	鳥養利三郎京大総長、落合校長に合同を打診。
1948	1	13	京大学部長会議代表木村廉医学部長・本田弘人事務局長、三高訪問、合併を正式に申し入れ。
	1	26	寄宿舎中寮討論室付近から出火、中寮・南寮・北寮全焼。生徒 1 名焼死。
	2	13	教授会、京大と合同して新制京都大学発足に協力することを決定。
	3	9	京大・三高代表からなる合同委員会発足。4 月 17 日第 1 回開催。1949 年 8 月末まで計 9 回開催。
	4	10	入学式挙行、初の女子生徒入学。
	5	1	創立第八十周年記念式挙行。引き続き講演会、野球大会実施。
	5	10	労働組合結成大会挙行。
	7	25	対一高陸上定期戦で勝利。8 月 1 日に庭球・水上、8 月 8 日に野球も勝利。
	10	30	第 80 回記念祭挙行（～ 11 月 4 日）。4 日に大運動会開催。
	11	8	大学設置委員会、京大・三高を視察（～ 9 日）。
1949	2	16	及落会議。合計 103 名が原級留置。3 月 7・8 日に追試験実施。
	5	1	第 81 回創立記念式挙行。
	5	31	国立学校設置法公布。新制京都大学発足。従前の京都大学・附属医学専門部・第三高等学校を包括。第三高等学校は「京都大学第三高等学校」と改称。
	5	31	落合太郎校長退任、島田退蔵校長事務取扱に就任。
	11	2	三高文化祭実施。
1950	3	31	国立学校設置法一部改正公布、第三高等学校廃校。
	3	31	三高解散式挙行。

京都大学大学文書館企画展

敗戦から廃校まで

―三高最後の年月―

編集・発行　京都大学大学文書館
発 行 日　2020年9月1日
印　　刷　河北印刷株式会社